

スリーカードを弾薬箱の上にうつちやると、悔しげな唸り声が彼の耳をくすぐった。相手はブタらしい。その認識が、ポーカーフェイスを突き崩した。トトカルチョの決着。歓声と罵声が機内へ一斉に吐き出された。

カードを放った相手が天井を仰ぎ、後ろでは大男たちが水筒を叩いて吠えている。こちらの背後では、これまた大男たちが互いの拳をあわせて喜び合っていた。高高度の空を飛ぶ輸送機を揺さぶらんばかりの大声。彼——シェリンフオード・ベルも拳を突き上げてそれに応え、差し出された戦闘食にこれ見よがしにかぶりついてみせた。

戦闘前後の栄養補給のために支給される戦闘食が、ベルの身体から疲労を強引に拭いて去っていく。水筒も同じようにぐいと飲み干した彼は、がら空きになったハンモックにどろどろと座り込んだ。「勝ち逃げっすか、隊長？」という声を手で追い払い、ニヤリと笑う。

「でかい勝負はやるなつてのが家訓でね」

仕事の後に脚を伸ばせるのが報酬だ。そう嘯いて、彼はハンモックの金具をぎしと軋ませた。

特殊作戦^は手当^しと危険手当^たのために命を賭けるほど酔狂になった試しはない。その酔狂をしてみせているのだから、これ以上のギャンブルは御免だ。そんな本心が繰り出した軽口だったが、成年にも達しない部下には伝わらないらしい。「よく言うよ」と部下たちが笑

う。

「機械相手に一対一仕掛けるお人がギャンブル嫌いなんて、誰も信じませんぜ」

「あつという間にのしちまったからな、女にもそうやってんですか？」

斥候が口火を切れば、続くのは射手。ニヤニヤと笑う他の部下たちも、例外なく厳しい選抜をくぐり抜けてここにいる。『人の嫌がることをする』をモットーにかき集められたエリートを散々ふるいかけ、それでも残った粒ぞろいの本物たちだ。

現場では手足のように操れる部下が、終わった途端にコレだ。「バカタレ」と投げやりに応じて、ベルは再び水筒を呷る。

「女の痛みは負債なんだ、削るに限る」

「そんなこと言って、逃げられても知りませんからね」

下卑た笑い声をあげる部下に苦笑を投げると、「男は射撃あるのみですよ、隊長」とさらに前のめりになる。興味の色が途端に褪せていくのを視界に感じて、ベルは僅かな色彩だけは留めるように努めた。

「ただでさえ武装職は敬遠されがちなんですから、ガッツと包容力をアピールしないでどうするんです」

「敵前逃亡ですよ、隊長。敢闘精神が足りません」

好き勝手に言ってくれるものだ、と別の意味で苦笑が浮かぶ。

戦時でもないのに早々と身を固めたがるのは、いつの時代も身寄りのない隊員だ。その隙についてヒューミントを仕掛ける反社会团体もいれば、防諜のために気を張るのもベルの仕事なのだった。

だからこそ、彼らの話をすべて聞き流すわけにはいかない。彼らの敢闘精神が上官の仕事を増やしているとは夢にも思わないらしく、話はいっしか彼らの釣果に移っていた。

彼らにベルの懸念が伝わっていないのなら、それはそれで防諜体制が確立できているのだろう。知らないことを漏洩することはできないのだから、と無理やり安心しておく。

その安心が、一瞬の話題の飛躍を聞き逃していた。「ああ、バッジ攫いだろ？」という声に、ベルは素っ頓狂な声を上げてしまう。

「噂ですよ」

ひそめた眉に答えた部下が、苛つくほど自慢げに指を鳴らす。

「最近、特殊部隊の隊員が次々に異動になってるって話です。所属は不明、もちろん目的も不明。何のために集積されているのか、誰も知らないし教えない」

聞いてみれば呆気ない、陰謀論にもならない与太話にしか聞こえなかった。「くだらない」という苦笑が吹き出る。

「都市伝説にしちやよくできてるな、今度はジュブナイルブームか？」

バカタレ、と言いたげに口を開いたのは分隊の先任曹長だ。勤続年数は二十余、彼に頭の上がない局員も数多い。その揶揄にも動じず、部隊きつてのスポッターは「本当の話ですよ」と口を尖らせる。

「統幕出向の同期から聞いた話です」

「だから眉唾なんだろうが？」

切り上げようとした先任の言葉も儂く、続く声が話題をつないでしまった。「それでもないんですよ」という別の部下の声が直接の引き金になり、彼らは弁舌を振るい始めていた。

「特殊部隊の引き抜きは、正確には内示と請願で行われています。司令部からの命令では目立ちますが、請願という形をとればいろいろな名目つけられますから」

「連絡要員だとか、部隊間協力だとかか？」

「そういうことです。新規配属先はバラバラですが、そこからの追跡可能性はゼロ。すべて巧妙に隠蔽されてます」

「合法的に特殊部隊員を隠匿して、秘密の部隊でも設置しようっていうんじゃないのか？」

「秘密の部隊だからバッジもない。確かに攫いだな」

陰謀論にしてはいい出来らしいが、感想といえどそれくらいのものだった。呆れた、という表情を露わにして、「しっかり縫い付けておくよ」と顎をしやくる。話は終わりだ、という明確なサインに、毒気を抜かれたようにトーンが下がる。

潮時と察してくれたのか、それとも単に白けただけか。三度カードの相手を選び始める彼らを眺めるにつれ、やいのやいのと騒ぐ部下たちの声は次第に遠くなっていく。

任務は終わったのだから、少しリラックスしても文句は言われまい。彼はしばらく身体から力を抜くことにした。

「お疲れですか、三佐殿」

それを見咎めたように先任がにじり寄ってくる。部下が見ている前で士官がだらけるのは不適切、ということだろう。特殊戦開発グループを任されるようになってからこつち、彼は一年弱にわたって女房役を務めてくれている。実戦に投入される士官のあるべき姿——それも特殊部隊という限界状態の中での士官の有り様を、折に触れて促してくれる彼に、ベルは何度も助けられていた。

そうでなくとも、もつさりと髭を生やした中年男と肌を触れ合わせる趣味はない。「歳かな」とだけ返して、ベルは少しだけ身体に力を込めておくことにした。

ハンモックからはキャビンの全体がよく見えた。戦闘服姿の男が、ベルを含めて八名。

時空管理局次元航行陸戦隊の精銳、第一特殊空挺連隊にあつて特殊戦開發グループに所属する隊員たちだ。いずれも空中侵入課程を突破した英俊は、銃を握らせれば敵の額に風穴を開け、ナイフを握らせれば敵の内臓で切り身を拵える。革新系メディアには〈連合政府の懷刀〉と揶揄される殺し屋部隊だ。

その先任といえ、当然ベテランの殺し屋ということになる。ベルが部隊長としての面目を保てる理由は、つまるところ年齢だ。彼の半分ほどしかない年齢が、ベルの身体に無理を許しているにすぎない。忸怩たるものがないではないが、ベルには戦う以外の役割もあつた。「あの戦いぶりですそれは聞けません」と苦笑する先任は、笑い以外の色を目に潜めていた。

「……中隊長殿、アレはなんなのです。真面目な話」

「……防刃防弾措置を万全に施し、耐衝撃性も担保しつつ柔軟かつ高速に駆動する二足歩行ロボットだ」

韜晦しているわけではない、と内心に言い訳する。訊かれても答えようがない質問というものは常に存在するのだ。そして、部下の質問には確信を持った返答だけをすべきである。自分が目にしたものと頭の中とをすり合わせた結果が、あの回答だった。「大したロボットですな」と応じた先任は、それを察した上で声を低めている。

「今後我々の仮想敵にアレが加わるというなら、研究が必要です。三佐ならおわかりのことと思いますが……」

情報 は 生死 を 分ける。「わかつているとも」と答えておき、ベルは改めて先任の目を覗き込む。

「そのために捕獲し、リスクを取ってこの機体に載せてきた。あいつらを全員起こしておきました。技術参謀には給料分の仕事をしてもらおうとしよう」

実際に研究が始まれば、部隊の技術要員だけでは確実に足りなくなる。公営の兵器廠や民間の軍需産業、大学や研究機関まで動員する必要があるだろう。これほどの脅威を公開研究などできるはずはなく、結局まともな研究は期待できない——ということだ。

それを折り込んだ上での、給料分の仕事。内規破りの責任くらいは丸呑みし、心を鬼にして尻を蹴飛ばすという意味表示。「……やはりあなたはギャンブラーだ」とさばけた先任は、軽く敬礼をみせた。

また歓喜と罵りの声がカーゴルームを満たす。勝負が決まったらしい。どちらが勝ったのかを見ようと興味を浮上させた彼は、『ジェントルメン！』というスピーカーの大声へ視線をくれた。

『当機はあと十五分でアグスタ航空基地に着陸する。手荷物をしっかりと確認してくれ。薬

英とお客さんを忘れるなよ！』

輸送機の高度が徐々に落ちていき、代わりに音が大きくなっていくのを感じる。壁際に群がる部下たちを迎えるように、ベルはハンモックから起き上がって腰元のベルトを締め始めた。

用途の違いはあれど、航空基地の光景はどこも大差ない。ジェットエンジンの轟音がそこかしこで響き、航空燃料のかすかな香りが風に乗って鼻をくすぐり、オリブドラブの箱たちが満載になったパレットが滑走路脇を転がっていく。灰色に塗り込められた輸送機が一機そこに入り混じり、風景の一部として賑やかしの任を負っていた。

輸送機の尻の部分から吐き出されたベル分隊の男たちは、着陸前に隊長^{ベル}から指示された仕事に取り掛かる。ある者は官給品のデバイスを回収して部隊の整備大隊に引き渡し、またある者は輸送機に載せていた大小のコンテナを基地の倉庫に移送。しかし、今もつとも多くの班員が従事しているのは周辺警戒の任務だった。

彼らが守っているのは、今しがた運び出されたコンテナである。泣く子も黙る特殊部隊がわざわざ持ち帰った代物を、適当に移動できるわけもない。彼らの最高司令部からの直

接命令があれば、首都近郊の航空基地だろうが完全武装で警護するのも仕事のうちというわけだ。少なくとも基地警備隊の完全管理下に置かれるまでは、持ち帰った張本人たちが警備するよりない。そういった事情もあり、分隊全八名のうち、実に半分がその移送と警備に充てられていた。

そんな中、ベルはひとり基地の隊舎に向け歩いていった。扁平な滑走路から地続きの、ただっ広い荷解きのスペース。一月の寒空の下、時折ぞくりと震えるような極寒の風を防ぐものは何もない。色とりどりのビジネスジェットや輸送ヘリコプターでさえ、膨大な風を押しとどめることはできずにいる。要撃機や偵察機が訓練離陸していく風などは最悪の極みだった。壮絶な音と風のダブルパンチには物理的にゾッとする。底に鉄板を仕込んだ半長靴を打ち鳴らしながら、突っ切るようにベルは歩みを進めるしかなかった。

世が世なら『ミッドチルダ連邦軍海兵隊所属』と称される彼は、アグスタの主である航空警備隊——旧ミッドチルダ連邦空軍にとっては部外者だ。プライドの高い空の人間のひと、ズカズカと歩いていけば文句のひとつも言われそうなものだが、彼に突っかかってくる者はひとりもない。それどころか、彼に視線を合わせようとする者さえいなかった。

ポーチやベストを着用したままの戦闘服姿は、武器を持っていなくとも気圧されるものがある。厳めしい装備を身に帯びた、身長二メートルほどの大男。むくつけきとはいかな

いまでも、体格は間違いなくよい部類に入る。それがひとりで、しかも早足で歩いているとくれば、近寄りがたさを感じるのも当然なのかもしれない。

戦闘服という格好も問題なのかもしれない。灰色の視線を巡らせるだけで周りの顔がそくさと背けられていく。これだけわかりやすいと、避けられている側も楽しくなってくる。彼らの着ている服が航空警備隊のツナギだというのが、ベルの悪戯心に拍車をかけていた。

緑とも青ともつかない微妙な色合いが、揃いも揃って格納庫の中をうろちよろしている。ジオラマかマスゲームでも見ているようだ。統制の取れた動きは間違いなく訓練されたもので、彼らの実質的な主人——空の住人に傳いて世話をするプライドさえ感じさせた。

電子戦用のポッドを搭載した偵察機、さっきまでお世話になっていたのと同型の輸送機。それぞれに多くのツナギがまわりついているが、特に多くの整備員が集まるエリアの真ん中には、飛行機とは似ても似つかないモノがいた。

空戦魔導師。ジェットの轟音を吐き出すこともなければ、バカみたいに航空燃料をドカ食いすることもないスマートな兵器だ。時空管理局が誇る暴力装置——武装隊でも最精鋭と自称して憚らない彼らは、事実その自称にふさわしい華々しい戦果を挙げている。デバイスからバリアジャケットまで、まるで王族のようにお世話されている彼らを横目に見て、

ベルの口元には乾いた笑みが浮かんでいた。

大きな力を持つ代わりに、彼らは単独ではひどく脆弱だ。自己完結性のない戦力ユニットほど扱いにくいものもない。魔法という力ひとつとっても、結局は筋力と同じく休まなければ全力を出すことはできないのだ。体力と違うのは、魔力の回復にひどく時間がかかるという点。そこに作用するのは訓練量ではなく、ひとえに才能という如何ともし難い変数だ。

彼の頭に不満が蓄積していく。しかし、これは客観的な考えではない。むかつく胸中をそう断じて、ベルは視線を再び自分の前に向けた。

数多の血と汚染物質をばら撒いて、75年前にようやく終結した近代ベルカ戦争。帝政ベルカを打ち破ったミッドチルダ連邦が、自他の別なく反省の証としてリードしたのがクラナガン憲章だ。その第9条では、大量破壊兵器の研究・製造・保有・使用の完全禁止が定められている。

大量破壊兵器完全放棄を監督する第三者的国際機関の創設。各国軍の指揮権を筆頭とした最高権、政治運営の根拠となる統治権の段階的な統合と、統合先としての汎次元連合政府の建設。これらの歴史と法規範があれば、公権力たる時空管理局武装隊が弾道学を基盤とする通常火力の運用を控えるのも理解はできるのだ。

その結果が、物理的に被害を局限できる魔導弾道学をベースとした新たな暴力装置であり、ベルの視線の先でちゃんと佇んでいる生っ白い航空魔導師である。

属人的、希少性、非完結性。運用困難なこと限りないが、政治的にも物理的にもクリーンではある戦力。正当な暴力装置であれば、どちらを優先すべきかははっきりしている。

自分を強引に納得させる、その隙をつかれたというべきだろう。「お疲れ様、三等空佐」という耳慣れた声に、ベルはびくりと肩を跳ねさせた。

濃紺の制服姿が、いつの間にか彼の前で微笑んでいた。ブラウンの髪を冷たい風で流し、スタイルのいい長身に映えさせている。バインダーやマニラフォルダを小脇に抱えた姿は、さながらどこぞの秘書か副官だ。士官学校の元ティーンが一度は夢見る美人の副官。彼女はそれを——少なくとも見た目では実現していた。

「……もしもし？」

すらりと伸びた長い脚はタイトスカートの似合う細やかなもの。挙句、アーモンド形の涼やかな目がこちらを見つめている。熱もなければ冷たさもない、常温とも呼ぶべき平坦なそれが、彼女にいつも通りの懐かしさを与えていた。

そのいつも通りに艶を覚えるのは、きっと俺^{無理やり}だけなのだろう。ボヤくまでもなくそう断じて、彼は「ありがとう、高等法務官」と如才なく応じた。

倉庫の中から無造作に近づいてきたのだろうに、彼は彼女に気づくことができなかった。こいつの底知れなさは相変わらずだ。ベルは彼女——メアリー・ロザモンドの瞳を覗き込む。「久しぶりだな」と笑うと、メアリーは水も漏らさぬ笑顔を浮かべてみせた。

「シャワー、浴びてきたら？」

挨拶より先に繰り言、そして手鏡。久しぶりとは思えない気安さに表情筋が緩み、鏡の中のベルも笑った。泥と汗でボサボサになった髪、鏡で見るまでもなかったが、ここまでは。そりゃ小言も言われるわ、と思いつつ「あとでな」と煽って、彼は再び基地の隊舎に足を向けようとした。

遺失物ほどではないものの、危険な代物を基地に持ち込んだ以上筋を通す必要があった。それを抜きにしても、現場の最高指揮官としてある程度の引継はしなくてはならない。だからこそその挨拶だったが、彼女は片眉を跳ね上げた。

「アグスタの基地司令官は綺麗好きなの。あの人が認めるのは汗と機械油だけ。少なくとも泥は落としてきなさい」

がし、と手首ごと袖口を掴んで、彼女はベルをどこかに連れて行こうとする。踏みとどまることも振りほどくことも簡単だったが、メアリーの手には抵抗しないことに決めている。「シャワーのあてがない」と言葉だけ反駁しながら、びっくりするほど柔らかい彼女

の指の腹をごわと手袋の生地で撫でる。

「シヤワーならあるわ。私が帰るまでの間、使わせてあげる」

すいところらを向いた琥珀色の視線が、右手のいたずらを咎めてくる。ひよいと肩をすくめて、ベルはされるがままになってメアリーについていった。

「士官になって何年経つのも、身だしなみくらい整えなさい」

「いつもは意識してさ。今回は作戦後なんだ」

ともすれば権限争いにも発展する引継にあつて、作戦終了後だと身をもつて示すのも戦術となりうる。疲弊した人員装備をいち早く本拠地に戻すためには、それなりの準備と作爲が必要なのだった。

しかし、彼女はそれをよしとしない。スマートじゃない、と言わんばかりにため息をつく。

「搦め手を使うのもいいけど、みつともない真似はしないで。あなたは士官なんだから」

「佐官にもなつて現場に出る士官、な。人的が潤沢な空隊が羨ましい」

そういうダークな揶揄のつもりがないでもない。「それはわかるけど」と、そこばかりは彼女も苦笑する。

「陸戦隊の立場が悪くなる……なんて言うつもりはないけど、わざわざその可能性を取る

必要もないでしょう」

彼女の話に乗せられているうちに、ベルは民間供用エリアに足を踏み入れていた。大型四発の民間機が、これまた轟音を上げて滑走路から飛び立っていく。空隊と比べればさすがに緩みのあるグラハンたちを横目に、ふたりは律動的な歩みをピタと止めた。

「はい、ついたわよ」

彼の目の前には、白塗りのビジネスジェット機がでんと駐機されていた。時空管理局所属を示す機体登録番号とマークを除けば、民間でも使われている上等な機体だ。それを、私がとは。そりやどうも、と茶化すこともできず、彼はただタラップを登ることしかできなかった。

気取った内装が鼻につく。ワイデン調だかオルタナ調だか、ともかく何とか調とかいう名前であることは間違いない。綺麗に揃った木目には分厚くニスが塗られ、かばんが投げ置かれたソファは見るからに座り心地がよさそうだ。よくある飛行機用の座席もふかふかで、壁ひとつとっても丁寧に仕上げられている。「税金の無駄だな」という笑い声は、自分でもわかるほどに乾いていた。

「これしか空いてなかったんですって。そうでなきゃ、三佐相当が借りれるわけないでしょ」

自分の懷が痛むわけでもなければ、これほど美味しい思いも他にはないだろう。實質貸し切りで飛行機を飛ばせるのが高等法務官の特權であり、そうでもしないと手がいな
高度専門職員いという悲しき懷事情の裏返しでもあった。

それでも、これだけの機体を借りる機会はさすがにそうそうないらしい。彼女も泰然としてゐるようでいて、若干座りの悪そうな素振りを見せている。居心地の悪さはお互い様か、とほくそ笑んで、彼はシャワールームの戸を開けた。

正面に作り付けの鏡台と戸棚、左側にシャワーブースの蛇腹になったドアがある。右側は壁だが、こちらにも抜かりなく技巧が凝らされていた。それにしても、脱衣所まで用意しているとは。呆れて物が言えないとはこのことだった。

「入って正面の棚にバスローブがあるはずだから、出たらそれを着ておいて」

戦闘服は私が綺麗にしておくから、と続けた彼女は、どうやら飛行機が出るまで暇らしい。ちようどいい暇つぶし先が見つかったということなのだろう、と納得して、彼は「はいよ」と戸の向こうに声をかける。

「シャンプーは適当に？」

「いいわよ、どうせ使わないし」

ポーチとベストを外して、まずは上着を脱ぐ。いくら戦闘服とはいえ、着脱の方法は普

通の服とあまり変わらない。そうでなければ、慣れないところでシャワーなど浴びないというものだ。瞬く間にすっぽんぽんになった彼は、若干の寒さにあわててシャワーブースに入る。蛇腹をガラリと閉めると、待っていたかのように脱衣所の戸が開けられた。濃紺の影がするりと床から戦闘服を拾っていくのがわかる。高慢ちきに見える彼女の気遣いは、昔から助けられどおしだ。「ありがとう」と声をかける。

「はい、ごゆっくり」

くすくすと笑ってそう返し、彼女は再びドアを閉める。やはり彼女は笑い声がいい。気持ち悪いぞ、と自戒しながらも、ひとり相好を崩すのは抑えきれなかった。

にやけていても仕方がないとばかりに、彼はシャワーヘッドを引つ掴む。お湯を示しているのだろう。もう片方の手で赤いノブをぐいと捻って、思ったとおりのお湯を背中に浴びる。冷えきった身体をじっくりほぐされるような感覚に、彼はしばらく悦に入っていた。

「湯加減はどう？」

脱衣所のさらに向こうからの声に、若干の大声で「生き返るよ」と応える。ごう、という音が響くようになって、彼女の声も聞き取りづらくなっていた。

ポンプでお湯を組み上げているのか、振動が時折シャワールームを突き上げる。相当強力なポンプを使っているのか、それとも安物なのか。どれだけ内装に気を使っているか、

使つてコレなのでは世話はない。変なところで妙な安心感を得て、彼はシャンプーを手に取ろうとシャワーを止めた。

「……おい」

ポンプの音は止む気配を見せない。轟々と水を吸い込み続けている。時折、そこに高周波の音が混じるようにさえなっていた。きいん、という音が間断なく響くに至つて、彼はようやくそれがシャワールームに属するものではないと悟つた。

そうと気づくと、振動も強くなっていることにもすぐに気付けた。ごとり、またごとり。まるでゴムでなにかを踏みしめているかのような感触。

タイヤだ。そう気づいた彼が蛇腹の戸を音高く開けたとき、彼の身体は横ざまにぐいと押された。

「なにかに掴まってなさい」

ブースの戸を開けたからか、脱衣所の戸越しの声は若干明瞭になっていた。ソファではなく、前の方にある座席に座っているらしい。シートベルトがあるからか、と気づいた彼は、思わず「クソっ！」と声を上げていた。

あの雌狐め、何がシャワーだ。アイツは堂々と大胆に俺を誘拐してみせたのだ。フル装備の特殊部隊がほんの数メートル先に控えている中で、文字通り表情と仕草と、神がか

りのうまい口車で——！

昔懐かしの綺麗な笑顔にほいほいノセられたとは、意地でも思いたくなかった。それを戒めるかのように、離陸するジェット機の慣性が素っ裸の彼を押さえつけていた。

やけくそ気味にシャワーを浴び直してから、ベルはバスローブを着るのもそこそこに戸を思い切り開けた。先ほどのおっかなびつくり具合はどこに行ったのか、ゆったり悠然とソファに身体を預けたメアリーが、ベルの戦闘服をふわりと浮かべ眺めている。服のそこかしこから土くれが浮かび上がっては、ゆつくりと下に置かれたゴミ箱へ落ちていくのがわかった。

魔法。空気中の水分を服の表面で結露させ、一定サイクルの超音波を発生させて汚れを落とす、水分を再び空気中に戻して汚れだけを服から分離し、汚れの落下位置と速度を制御するもの。概念上は一定の手続きとして処理できるが、空気中の水分量や服のどの部分に作用させるか、はたまた汚れを分離した時の空気の流れや機体^重の高度^{誤差}に至るまで、具体的に考えなければならぬことは無数にある。世間に洗濯機という便利アイテムがある以上、魔法でやるにはおよそ非効率だったが、こと飛行機の中ではそんな贅沢は言えないの

だった。

戦闘服から制服に着替える時間くらい、くれればよかったものを。最後に空中でピシリと畳んでみせた彼女に拍手を贈りながら、ベルは胡乱げな目を隠しもしなかった。

「Bravoー……ふふ、Bravaだっけ？」

バーカウンターのスツールに腰を預けて、彼はメアリーにそう問いかける。折角の褒め言葉にも、メアリーは「近代ミッドチルダ語なら、男女関係なくBravoでよかったはずよ」と素気ない。

「ミッドガルド語のつもりなら、それはそれでお門違いよ」

これだから……と言いたげに肩をすくめる彼女に、ベルはむきになる。「ヴァイゼンだろ、出身」と言い募ると、メアリーは苦笑してベルの眉間をじつと見つめてくる。

「旧ミッドガルド共和国で使われてたのが、ミッドガルド語。ミッドチルダと組んで中央連合なんてやってたし、近代ベルカ戦争のドタバタで公用語なんかメチャクチャだけど」

その辺、歴史でやらなかった？ やったかもしれない、と曖昧に頷くと、メアリーは額に手を当てた。白魚のような指が眩しい。

「相変わらずの緩さね、あなたは」

メアリーはくすくすと喉を転がす。その声は、声だけが笑いにコーティングされていた。

本題だ。顔に笑顔を貼り付けて、ベルは気分だけずいと前のめりになる。

「あなたを連れてきた理由は、あなたが連れてきたモノにある。セキュアチャンバーの身、特殊戦開発グループが管理外世界から持ち帰ったお土産にね」

アレは何？ そう問いたげな彼女の視線に、ベルは「知らん」と答えるしかなかった。視線を眇めるメアリーへ眉を八にして、より冷たくなった視線を甘受する。

事実、アレに関して彼が話せることは何もない。管理外世界での非合法テロ抑止作戦中に予定外の襲撃を受けたというだけだ。たらふくタマを叩き込んで機能を停止させ、独断でコンテナに押し込んだ。魔導加工技術が使われているという感触は受けたが、確実なこととは何ひとつわかっていない。

コイツの所属からして、作戦中に司令部へ上げた情報はすべて持っていると思ってい。これ以上アレはなんだと聞かれても、せいぜい――。「積層構造ってのか、防弾防刃は鉄壁だった」という言葉にはじまり、彼は自分の所見を喋りはじめた。

「何使ってるんだか知らないが、えらい馬鹿力だ。班の半分でようやく跳ね除けて一斉射、それを全部さばきやがった。余裕なんだか機能ついてないんだか、無表情が怖いなのってな」

片膝を立てたニーリングの姿勢を取って説明してやると、メアリーの表情が一転して紅

潮していった。妙に視線をあさつての方向に逸らし「わかった、わかった」としきりに頷いている。一体何だ？ 訝しむベルの胸を風がすり抜け、鳥肌を掻き立てていく。自分がバスローブのままだったことに気づいて、ベルはごまかすように咳払いをした。

「とにかく恐ろしいヤツだった。詳しい部分は技術参謀部の見解待ちだが、少なくともヤツと同種の敵を想定した訓練は必要だな」

好き好んで異性の旧友にイチモツを見せたがる奴もいないだろう。少なくともベルにそういう趣味はない。半ば強引に会話を押し切ると、彼女も喜々としてそれに乗っかってくる。「そ、そうでしょうね」という声を取り澄まされているのは、予想できた答えだからというだけではあるまい。

ともあれ、彼女にとつては予定調和の内容だったはずだ。「それが？」と聞くと、メアリーはごまかし——こちらは完全にそうだ——の咳払いをして口を開いた。

「特殊空挺連隊（ゾウ）の危機感を煽るのが今次作戦の趣旨なの。だから、その結果を聞きたくて」不快というより、呆氣にとられるというのが正しかった。アホ面と呼ぶに相応しい顔をメアリーに見せつつ、ベルは頭のあまり回さない部分を起動（命）しにかかる。

統幕議長が発した管理外世界（行）における武装隊安全保障行動命令一七三号の目的は、管理外世界への隠密派遣・テロ等危険の事前排除だ。そこに因果がどれだけ含まれていたとし

でも、現場の隊員にしてみれば関係ない。上級司令部がどれだけ後ろ暗い目的を持っていたても、一度下った命令には従う。そういう意味で言えば、思考停止謹厳実直こそ管理局武装局員の基本テーゼだった。

隠された思惑を吐露されても、正直反応に困る。それ以前にルール違反だ。横目で眉を吊り上げると、メアリーはベルの肩を叩いてきた。

「文句がありそうね。でも、あなたもなんとなくわかってるはず……あなただからこそ、かもだけど」

見透かしたような口の利き方も変わらない。新品のように整った濃紺の制服に盾とサーベルの徽章を認め、ベルは鼻息ひとつで心を落ち着けにかかった。この程度、昔は日常茶飯事だった。彼女には嘘もつけないし、驚かそうという考えさえ通じない。それがわかっていても、肩ががくりと落ちるのは止められなかった。

その肩を抱くように——体格差のせいではほとんどしなだれかかるようになりながら——メアリーは言葉が続ける。

「暗黙の了解とか、昔からこうだったとか。そういうのは全部なしにしないと、アレが引き起こす事態に対処しきれない。あなたが技術参謀にねじ込もうとしてるのも、煎じ詰めればそういう話よ」

目を閉じて紡がれた言葉を聞くにつれ、ベルの背筋が凍りついていく。

先任にしか話していないことを、メアリーはどこからともなく聞きつけてきたらしい。

底知れないというのか、空恐ろしいというのか。その事実ひとつとっても、彼女が生き馬の目を抜く次元航行艦隊司令部員元法曹だという証拠になり得る。

いや、そもそもコイツは高等法務官なのだった。何をか言わんや、と呆れるにとどめて、ベルは「すると、なにか？」と口を尖らせた。

「俺をわざわざ拉致したのは、な、あ、な、あは通用しませんよっていうつまらんブリーフィングのためか？　こういう真似は嫌いだって……」

「もちろん覚えてますわよ、シェリンフォード・ベル3等空佐殿。同じ指揮幕僚資格を取った、あのフォート・アグスタでの一年間はね」

呑まれまいとする無意識の警戒を悟られたのだろう。カチ、と彼女の能面が切り替わるのがわかった。嫌味を通り越して、いつそ丁寧なまでの言葉。彼女を苛つかせれば、だいたいはこうなってしまう。売り言葉に買い言葉、空売りも踏み上げもお手の物とくれば、彼女に口喧嘩で勝てる者などいない。「弁護士をやめたばかりの私のお世話をしてくれたんでしたっけ？」とため息混じりの刃を向けてくるに至って、ベルは内心両手を上げていた。

「それを押してでも働きかけなきゃいけなかったって、言わなきゃわからないあなたじゃないでしょう？」

弱り目をギリリとつねりあげたのを最後に、メアリーはそっと身体を離す。細身のくせに案外温かかったらしく、離れた後の感触が嫌に冷めていく。拍子に、自分がバスローブだったことを思い出して、ベルはひとつくしやみをした。

俺から服を取り上げるのも必要のうちか？ 潤んだ目でそう咎めると、メアリーはクリーニング店のバッグを形のよい顎で示した。「着替えはあっち」という言葉は、アレ以上汚いものを見せるなということだろう。よく見れば、彼女の頬がまた少し赤くなっていた。

言わなくても着替えるときは引っ込むというのに。布地の厚いバッグを拾い上げて、ベルはまた脱衣所に引っ込んだ。

服を着る音が聞こえてくる。自分がどこへ連れて行かれるのか、その問いから意識をそらすことには成功したらしい。迷いなく制服を着る音を耳で探りながら、私はひとつ息をついた。

出張でミッドチルダの連合政府自治庁に数日滞在していた私に新たな任務が下ったのは、実にほんの数時間前の話だった。航空警備隊アグスタ航空基地に向かい、指定する人物と合流して帰還されたい。シェリンフオード・ベルという名前の上に書かれたその命令文は、簡単に達成できるからこそ奇異に映った。

なにしろ任務にしては簡単すぎるのだ。自治庁をなだめすかして廃棄都市区画の再開発計画を廃案に持ち込めというものでもなければ、統幕情報部と連携してベルカ分離独立派のテロリストを無力化しろというものでもない。友人と旧交を温めながら飛行機に乗って本局に向かえばいいというだけのことを、正式な任務として発令される。そこに裏を感じるなどというのが無理な話だったが、どんな裏があるのかというところまでは踏み込めずいた。

アグスタまでの空路で彼の荷物をこちらに回すように手配するだけはして、あとは行き当たりばったり。適当に彼を言いくるめればどうにかなるという予測は、経験則でしかない割にうまく的中していた。そこそこ長い付き合いになるからか、私の中で彼は「使える割に扱いやすい同僚」という立ち位置だった。———こういうとまるで人でなしに思われるかもしれないけれど、これは私にとって最大級の褒め言葉だ。

この世の試練をすべてかき集めたような空中侵入課程を突破し、幹部局員の登竜門扱い

を受ける指揮幕僚課程も如才なく潜り抜けている。私と彼は指揮幕僚課程の初期からの付き合いで、互いのことはそれなり以上によく知っている。だからなのか、彼も私には警戒を解いているフシがあつた。嬉しいこととはいえ、足を掬われることにならないか……いや、私が足を掬う必要に迫り込まれないか、不安になる。

その不安は、ある意味では今まさに現実になっている。彼をうまいこと煙に巻いて連れ出したのは、本人がなんと言おうとだまし討ちに他ならないのだから。彼の部下や原隊に諸々話を通してはいるが、そこはそれ。彼本人を騙したことに変わりはない。

なんだ、全然簡単じゃないじゃないか。ジャケットを羽織る音を戸の向こうに聞いて、私は自分のかばんを手繰り寄せる。

目的地——時空管理局本局が近かつた。

苦さでコーティングした酸味が喉を焼いて、胃の腑まで滑り落ちていく。豆を砕いてお湯でふやかし、紙か何かで濾した飲み物。時空管理局にあつてコーヒーの淹れ方など大差ないだろうに、どうして部隊やオフィスによって味が違うのだろう？

コーヒー党というほど入れ込んでいるわけでもないが、大学時代からそこそこ飲み慣れ

ていることも事実。故郷の第四^{カルナ}管理世界もコーヒーの消費量が多いらしいから、きつと染み付いた考え方なのだろう。味や香りという感覚それぞれは気にならなくとも、総体としてのコーヒーについては考えずにいられない。そういう性分になってしまふというのは、まだ自分が人間であるという証左になっているようで、悪い気はしなかった。

それに比べて、この空間の人間味のなさときたら。何気なさを装って、ベルは辟易と周囲を見渡す。

オフィススペースといえば聞こえはいいが、金属と浅葱に塗り込めた部屋に人をぎゅう詰めにしてるのが実態だ。本局の部屋などどれも見分けがつかない。界挟空間の穴蔵に好んで住み着くような人種のことだから、居住性など端から考えていないのだろう。居心地の悪いことこの上ない。ぐいとコーヒーを呷って、ベルは眉間によりそうな皺を抑え込んだ。

なにこれ、という苦りきった声がなければ、本当に苦い顔をしていたに違いない。聞き流そうとして流せず、いやいや視線を横に向ける。

「スカイスプールスなんだろうけど……泥でも飲んでたほうがマシ。酸味ばかりで嫌になるわ」

眉ひとつ動かさずに毒を吐いて、メアリーがカップを机に戻した。ベルにとっては苦く

て目が覚めればコーヒーだ、塩が入っていれば尚よい。「いらないならもうぞ」と回収してぐい飲みする。ミルクと砂糖でほとんどカフェオレ、そこまでして泥みたいとは恐れ入る。

なにより恐ろしいのは、こんなところで毒を吐ける胆力だ。神経が凶太いというのか、単に無神経なのか。

こんなところ——次元航行艦隊司令部警務隊。その中でもここは防衛秘密の漏洩や贈収賄、サイバーテロ等の特殊犯罪捜査任務を請け負う中央警務隊のオフィスだ。失礼があればどんな仕返しがあるかわからない。自然、振る舞いは慎重になる。

本局くんだりまで来て、勤務評価を下げるだけで終わるのは願い下げだ。ベルは切に願う。勤続五年を越えて、管理局は偏執狂的なまでに人材のスクリーニングにこだわることを実感していた。

衝立をノックする軽い音で、ベルは雑念を脇に退ける。ほぼ反射的に立ち上がったのは、制服稼業で染み込ませた礼儀作法が半分、訓練や任務で刻まれた反射が半分だった。

「ごめんなあ、急に呼び出して」

陸上警備常装冬服

茶色の制服がせかせかとこちらに歩いてきて、向かい側に回り込んでくる。襟に二等陸佐の階級章を、胸に特別捜査官徽章をそれぞれ見て取りながら、ベルはさっと挙手敬礼を

とる。手のひらを相手に見せる陸戦隊仕込みの敬礼は、手のひらを下に向けるメアリーのそれとは違うものだった。

メアリーのものと同じ答礼をして、彼女は座るように手を出してくる。拒否する理由もないので座り、彼女の背の低さに少しだけ驚いた。

ベルの胸のあたり、メアリーと比べても耳までは届かないだろう。子どもか？ と一瞬思いつき、詮無いことだとそれを追い出す。第二次性徴さえ来ていない士官がいる社会で、今更身長くらいでガタガタいうこともない。

「八神はやて二等陸佐です。シェリンフォード・ベル三等空佐とメアリー・ロザモンド三等陸佐やね」

中等科^{セカンドグレイ}すら卒業していないようなガキに顎で使われるよりはいいというものだ。「作戦後なのに来てもらえて嬉しいわ」という八神二佐の微笑みに、こちらは無難な表情を見せしておく。

「作戦中に戦闘機人を捕獲したそうやね。私の部下がアグスタ基地から回収して、安全な場所に移してあるよ」

戦闘機人？ 耳慣れない言葉だったが、確保というからには捕まえてきたアレに違いはない。徹甲弾を撃ち込んでボロボロになった、おそろくもう死んでいるはずのアレ。そうか、

戦闘機人というのか。頭にインプットしつつ、「助かります」と答える。

「本当なら、ここで所見も聞いておきたいところやけど……あんまり時間もないし、今日はやめとこか」

にこやかに語る。年下のはずだが、上官としては十分な貫禄だ。これに能力が追いついていれば言うことなしだが、それはここで話すだけではわからない。

わかることと言え、言葉の訛りくらいのものだ。出身はボードレイだろうか？ 毒に

第二管理世界

も薬にもならぬ考えをかき回す。

共通言語にアクセントを加えることで出身地域を示す、というのが管理世界に住まう人間の習性になって久しい。ボードレイはミッドチルダやヴァイゼンに並ぶ先進世界で、戦乱の時代でも中立経済市場としてうまく立ち回っていた。その誇りからか、他の世界と比べても特徴的な訛りが形成されていると聞く。

まあ、管理外世界という可能性もあるか。適当に考えを捨て去って、ベルは目の前の佐官に焦点を集中した。

「ふたりとも忙しいやろし、単刀直入に言わせてもらうな」

ベルが集中した矢先、八神二佐が話を切り出してくる。

新部隊を創設する。のっけからのビーンボールに、思わずのけぞりそうになった。メア

リーも僅かに目を見開いている。

「任務は特定ロストログアの安全確保と、これの付帶的損害を防止することや。所属は古代遺物管理部の遺失物対策室」

古代遺物管理部は、統合幕僚會議に直屬する共同の部隊だ。汎次元連合政府に加盟する世界に散逸した古代兵器や技術を安全に維持することを主任務とし、それらによる危険を武装隊と協同して予防・阻止する任務も負っている。中でも遺失物対策室は存在や危険回避策が知られていない、また悪用されるおそれが高い代物を専門に扱う部署だ。

「遺失物対策室に六番目のセクションを置いて、特定遺失物対策部隊とあわせて運用する。アーム・アンド・ブレンモデルの実証も兼ねた実験部隊や。ただ……」

序列では同じ組織でありながら、ふたつの性格をもたせるという試みだった、か？ 苦もなく相槌を返すメアリーには敵わない。劍奴と將軍、手と頭。まさにその喩えどおりのバディなら、頭の出来が違うのも苦笑で甘受できるというものだ。

とはいえ、ここまで説明されれば猿でもわかる。実働部隊としての特定遺失物対策部隊、戦務組織としての機動六課。戦務はアウトソーシングなり若手をかき集めるなりで調達が利くが、肝心要の実働部隊は――。

八神二佐がため息をつく。

「人材不足も極まりってやつでなあ。捜査の頭は集まっても、肝心の手足に宛がない。それで、ベル三佐に来てもらったわけや」

空戦魔導士官学校から陸戦師団偵察大隊、幹部空中侵入課程、特殊空挺連隊。その後は統合幕僚会議付として高等幕僚課程、指揮幕僚課程を修了。原隊に復帰し、現在に至る。ベルの経てきたキャリアパスは、ざっとこのようなものだ。

有事の際、防衛計画の中で一般部隊の指揮や現場間調整を期待されるのが高等幕僚だ。その中でも特に強い権限を持ち、執務官や法務官などの専門職に対しても一定の指揮権を有するのが指揮幕僚である。当然、戦術レベルのみならず戦略レベルの思考を期待されるのだった。

特殊部隊にしながら、幕僚として戦略・戦術スタッフとしても使い物になる人材。確かにぴったりくる。

「ロザモンド三佐の理由はもっと身も蓋もない。法務担当ができるだけ多く必要なんよ」紙爆弾を取り回せる精神力と場数が必要という点で、下手なロートルを囲うよりもいい。丁々発止をやりあえる馬力は、一般的に年齢に反比例する。中途採用なら下手を打つても後腐れなく。パージできるのだから、使わない手はない。

「執務官の宛はついてるんやけど、彼女は捜査主任も兼任や。どうしても専任の法務担当

が必要になる。だから、弁護士をやったロザモンド三佐に来てもらいたい」

そらきた。メアリーの目が鈍く輝く。過去のキャリアをくすぐられると、コイツは途端にやる気になるのだ。「喜んで」という言葉にも喜色が載っているようで、ベルは唇を引き締めるのに必死になった。

とはいえ、まだ疑問が残る。そこを掬うように、八神二佐がこちらを見た。「なんで自分分が、って顔をしてるな」という言葉。バレている。

「捕まえてきてもらった戦闘機人、アレも今回の部隊新設の事情と無関係じゃない。……ううん、むしろアレへの対策こそ主眼なんよ」

今度こそ話が見えない。メアリーさえも首を傾げる中、八神二佐はコーヒーを傾ける。

「少し長くなるから、おかわりでもどうや？」

上官に淹れてもらえる僥倖は、そうあるわけではない。おまけに今は客人だ。ふたりとも遠慮せずに淹れてもらうことにして、それぞれカップを差し出す。

「ちよっと待っててな、ごゆるりと」

やはりボードレイの人間らしからぬ柔和さを見せつつ、八神二佐が衝立の向こうに消える。「ねえ」という言葉は、彼女の足音を半ばかき消すようにして放たれていた。

「どう思う？」

早速だ。少しは待てないのかと思いつつ、ベルはメアリーに向き直る。こちらへ前のめりになった顔は眉根を寄せている。「どうもこうもあるか」と顔をしかめて返す。

「突拍子もない、としか。古代遺物管理部への部隊新設と俺たちの呼集、それにあの作戦と戦闘機人とやら。全部が都合よくつながる現実的なストーリーなんてあるのか？」

本音を答えるしかなく、自然と声は低くなる。いくら情報を咀嚼する時間をくれたとはいえ、なんのこっちゃと大声で言うわけにもいかない。「さっぱり」と両手を上げるメアリーの声も、同様に小さいものだった。

「思いつくとすれば、それこそ戦闘機人に古代技術が使われている可能性。戦闘機人による事件を警戒するに足る具体的な警報があつて、そのために古代遺物管理部が専任部隊を必要としている……とか？」

「そのために指揮幕僚を呼びつける、か？ それもふたりも」

大げさすぎだと肩をすくめると、メアリーも「そもそも八神二佐が出てくる時点でおかしいでしょ」とやり返してくる。

「なんで人間戦略兵器がチマチマ人集めなんかしてるか。それに、執務官をおおっぴらに使えない事情ってなに？」

「戦略兵器を使用できない、しにくい環境での大規模事件。あるいは非合法……いや、超

法規的な作戦くらいだろうな」

「……執務官に広域捜査をさせて、専任の法務担当を別に必要とする。それだけ手続きが込み入ってるってことよね」

「おまけに中途採用の経歴を見て選任となると、仕事量は推して知るべしだ」

「艦隊司令部の業務よりも優先度が高い、あるいは人を選ぶ仕事。連合政府と直接やり合
うような仕事……？」

白晳の顔の奥で、緻密に整理された頭脳が回転しているのがわかる。答えが出かけてい
るのだろう。鳶色の視線が時折跳ね、焦点が合わなくなっていく。

「……連合政府との合同作戦？」

「……連合政府直轄領での軍事作戦か」

民間人を多く抱える、あらゆる意味でのバイタルゾーン。政治経済文化、人心、正統性
の中枢。攻撃されるということさえあつてはならない最優先地帯——。そこを死守するた
めなら、連合政府もあらゆる手を尽くすだろう。時空管理局武装隊の外郭団体に特殊部隊
を創設するが如き無法も、法を運用する連合政府にかかれれば書類の百や二百で済む話だ。

「機密性、緊急性、柔軟性。どれかひとつだけでも確立するのが難しいのに、三つ全部を
成立させろなんて。……呆れた」

「機密性を保つ艦隊運用本部、緊急性を担保する空挺部隊、柔軟性を維持する特別捜査官。三者が連携すればいける、と踏んだんだろう」

コーヒーがなくて手持ち無沙汰なベルを指差して、メアリーは「あなたと」とひと言つぶやく。今度は「私」と自身を指して、彼女はベルにもたれかかってきた。

「ふたりの連携ならまず問題ない、というわけね。あとは八神二佐との連携を――」

パン、パン。手を緩慢に叩く音で、ベルとメアリーは我に返ったように衝立の方を見る。カップ三つを浮かべて、八神二佐が半ば呆れたようにこちらを眺めていた。

「仲がいいというのは聞いてたけど、そこまでは思わなかったよ」

湯気を立てたカップをふたりの前に置きながら、八神二佐が苦りきった口を開く。すると元のよい姿勢に戻った彼女をよそに、ベルの目も同じく苦っていた。

「いろいろな人に同じような問答をしたんやけどな。頑張ってもふたりのとっかかりくらいにしか辿り着けなかった。……いや、そのはずなんよ」

やりすぎた。ジリとひりつく感覚が背中を苛む。

「法務官の必要性というヒントがあつたにせよ、人選ミスはなかったみたいやな？」

歩くロストログアの名に相応しい眼光が直にこちらを刺す。その苛烈さが、ふたりの推測が正しいことを証明してもいた。

「細かいところは読み違えてる。けれど、大筋においては正しいよ。首都で戦闘機人によるテロが発生するというレポートがあがり、そこに古代技術が絡んでいることがわかった。古代遺物管理部と武装隊が共同で対処することになり、部隊を新設するに至った。場所柄、法律上・部隊運用上で非常に繊細な対応が迫られることが予想されるため、それに堪える指揮幕僚を用いることとなった」

事態の重さを読み違えていた、ということだろう。首都という言葉に背筋がゾクリとなる。急所も急所、究極のアンタッチャブルだ。

「市街戦の経験が多い特殊部隊経験者と、日常的に對外折衝を業務とする高等法務官。後者はともかく、前者は数が揃わなければ意味がない。だから――」

「……誘拐犯はあなたでしたか、八神二佐」

まさに今日聞いた噂。バッジ攫いの話を思い出して、ベルは舌を動かす。「全軍の特殊部隊から人が消えていると聞きました」という声は、自分でもわかるほど低い。。

「そうです。高度即応部隊、特別立検隊、航空救難団。陸戦隊からも人員を集めている」「どれだけ集めたのです」

「主力打撃部隊は一個中隊。後方支援部隊は別部隊として編成、至近の基地に分散して配備する」

一〇二
名
一個中隊！

気の遠くなるような規模だ。それだけの人員をかき集め、しかもエビデンスをほとんど残していない。せいぜいが噂、それもベルのような士官や先任のようなベテランほど否定しにかかる程度のものでしかない。八神二佐の有能さよりも、むしろその執念に圧倒される。

「そして、ベル三佐。あなたにはその指揮を任せたいと思ってる」

心理的な隙に大ごとを投げ込んでくるスタイルが、彼女の十八番らしい。「中隊長、ということですか」と問うと、彼女はうなずく。

「ロストログアへの対応は部内に別働隊を編成して充てる。機動六課の主目的は首都防衛。建前はどうあれ、統幕も古代遺物管理部も了承していることや。防衛を担当する部隊……緊急展開中隊を任せられる人材として、ベル三佐以上の適任はないと思う」

光栄と受け取るべき話だということとはわかる。だが、なぜかすんなりと受け取れない。

こういうとき、ベルは自分の感覚を信じることにしていた。少なくとも実戦環境で、この手の感覚が嘘をついたためしはない。

「ロザモンド法務官には緊急展開中隊のオブザーバーとして動いてもらう。所属は本部管理中隊……つまり私の直属やけど、担当は緊急展開中隊の法務全般。有事には分析官の仕事もしてもらうけど、大丈夫か？」

「おまかせください」

相手の策に乗ってから丸呑みできるコイツとは、度胸も頭の出来も違ふのだ。メアリーの隣では、それを強く感じる。

だからなんだ。ベルは腿の上の手を自然に組み合わせる。

「さつきも言ったように、六課は実験部隊。期間限定のお試しという側面がある。地上本部のお膝元に本局の部隊を強引に設置する対価、というわけや」

パワーバランス。メアリーの言葉に、八神二佐の眉が跳ねる。

「首都の安全を守れた、その後のこと。彼らは部隊を役立たずとして送り返す気にいる」
「……本当に、ここまでとは思わなかった」

聞き流すだけの相手になら説明もしなかったのだろう。機密を守る鉄則は、その情報の重要さがわかる人間だけをスクリーニングすることにある。

「そういうことや。地上本部は元から、首都に危険が迫っているなんて思っていない。これを政治的なカードとしか考えてないんよ」

「彼らの相手をするつもりはない、と？」

「派閥争いに興じてる暇はないなあ」

随分直接的な言い方をするものだ。部下だからと気を抜いているのか？ 嬉しくないと

言えは嘘になる。頼りにされているという感覚が人をやる気にさせるものだというのは、局員として働きはじめて実感したことだった。

気安さを装っているだけかもしれないが、それはそれで頼りがいのある上司という証左だ。どちらにせよ、ベルにとっては嬉しいことだった。

「期間限定部隊への出向が終われば、当然原隊への復帰になる。ただし、この部隊が一定の成果を挙げることがあれば……」

「その成果にあわせた異動もあり得る、ということですか」

見え透いた釣り餌だが、それだけ魅力的な話でもあるのだろう。機会に恵まれて出世してきた自覚のあるベルにとっては、今更キヤリアに箔をつけようという気分にはなれない。あぶく銭で足を引っ張られるくらいなら、堅実な金で餓死したほうがいいというものだ。

殊更に釣り合いを気にするのは、なにもベルばかりではない。与えた以上のものを受け取ってはならない。どこかの商人の言葉を忠実に守っているのは、むしろ隣の合理主義者のほうだ。「空から落ちてきたコインは——」という声は、僅かに嘲笑を含んでいる。

「——持ち主^{ソブリン}に返さなくてはなりません。汎次元憲章と法律にのみ従うと宣誓しましたから」

「結構や。派閥争いには死んでも関与しなさそうな人種やとわかったよ」

にっこりと微笑む八神二佐に、さすがのメアリーも鼻白む。手の内を読まれる不快感は、彼女だからこそ強いものなのだろう。「ピュアなんですネ」と微笑み返すメアリーの目は、笑っていない。

「よく言われるよ、世間知らずの小娘やって」

対する八神二佐も、柔和とは程遠い笑みを浮かべている。どちらもそれなりの修羅場をくぐっているからか、どうにも自信が強いらしい。

挟まれるこちらの身にもなつてほしいが、そうも言っていられない。なんとか話を終わらせて、この息苦しい空間から脱出しなければならぬのだ。「それで」と言葉を差し挟む。

「我々の去就はともかく、問題は現実への対応です。たかが一部隊で首都圏を狙うテロに対処せよと？」

そりや役立たず扱いもされるだろう、と露骨に呆れを交えてみせる。格好だけとわかつてのことか、八神二佐も「有機的な連携で対応することになる」と跳ね返してくる。

「地上本部の地の利を活かせない以上、数の論理で押し切るしかない。陸士部隊や警防から協力部隊を募って対応するよ」

「協力と簡単におっしゃいますがね、それができるなら地上本部との対立だって起きてな

いでしようが。そりやピュアってんじゃない、世間知らずっていうんです」

「その世間に逆行してでも、やらなあかんことがある。それがわからないベル〰佐でもないやろ？」

本当に世間知らずなら、そもそもそんな発言は出てこない。さりとて、世間を盾に取った理屈は通用しない。やはり、理論武装は相方に任せるに限る。「……そりや、不満はありますが」と言うにとどめ、ベルは才媛に場を譲った。

「警察力と軍事力を分断するのは、文民統制の初歩でしょう？ それを形骸化するというなら、相応の理由が必要です」

「首都の住民が被害に遭う、というのは足りないか？」

「足りません。文民統制の形骸化で想定される未来の被害者も考えればね。それに……」
こういうときのメアリーは、至極楽しそうに笑うのだ。かつては笑われる側だったからよく知っている。「首都の人口はせいぜい20億人です」という声色には、もはや陰は皆無だ。

「一方、残り31個の管理世界全体の人口は推定800億人。たった2.5%のために、せつかくの文明的なシステムを台無しにするんですか？」

「〈オンオフ〉問題か？ ひとりを殺すボタンを押すか、押さずに10人を殺すか……」

「覚悟の上の作為は、怠慢の上の不作為に勝ること幾万倍。そういう寓話だと思ってました」

妥結した、ということだろう。メアリーの笑みがふと薄れ、八神二佐の肩が目に見えて緩む。

「我々は覚悟の上で前例を無視する。正義の割当は専門家の仕事や」

「無理を道理として通すのが我々軍官僚の仕事です。やりますよ」

メアリーよりも八神二佐のほうが経歴が長く、また立場も上にあたる。過度に煽るような発言といい、彼女には彼女なりの検め方があるのだろう。そう思うことにして、ベルは再びコーヒーを呷った。

「さて、これからの具体的な運びやけど……」

より砕けた口調が、ふたりが八神二佐の手中に堕ちたことを顕しているようだった。

古代遺物管理部遺失物対策室・特定遺失物対策部隊設置準備室。週明けからは新しい職場に出勤するよう八神二佐から命じられ、そこからが地獄だった。

非公式のものとはいえ、すでにあらゆる手を回している相手の命令を断るほどのクソ度

胸はない。木曜日に発出された命令に従い、作戦後養生休暇を利用して諸々の準備に奔走すること三日。ようやく出勤できる程度には落ち着いた新居は、気まずいことにメアリーの持つ別宅だった。

準備の半分は職務の引継に、もう半分は日用品の買い込みに。今頃、先任と中隊副長には連絡事項のメールが飛んでいるはずだ。日用品はといえば、今朝も使った身だしなみ周りのもの程度。あとは上等なスーツにコートくらいだろうか。シク高地に生息するヤギから採取した生地で作られたコートは、ベルのすくめた肩をするりと滑らかなものに見せていた。

市民はもとより、軒の主である科学技術省や所属原隊にも秘密を貫けという命令があれば、慣れないスーツも着こなしてみせなければならぬ。総合職国際公務員の上等なスーツに紛れるため、恥を忍んでメアリーにスーツの見立てを選んだのが一昨日。彼女は慣れた手付きで、官僚そのものといった無難な代物をバツチリ整えてくれた。

なぜ慣れているのだ、と疑問に思わないでもないが、場に溶け込める格好が整ったのは幸いに違いない。そろそろ仕事にもこなれてきた若手官僚か、それともうだつの上がらない理系技官か。どう見えているかはわからないが、彼を特殊部隊の三佐と思う人間はいるまい。警衛にさえ気取られずに済んだのは、なにもベルの訓練の賜物というばかりではな

い。可動式の壁沿いに廊下を歩きながら、つまらないことを考えられる状況に感謝しておく。

仮にも管理局の組織が、本部を科学技術省の庁舎に置いている。その事実自体、連合政府と管理局の間に一定の合意があることを如実に示していた。鵜の目鷹の目の地上本部も、連合政府が拵えた伏魔殿を見通すほどの眼力はない。警戒すべき外野からの視線を遮断するには、誰の目にもつかない——見ようと思わないところに置く。単純明快、故に実現が難しいことを、八神二佐は実現してみせたのだ。

5階でエレベーターを降り、科学技術政策局産業連携・地域支援課のオフィスを壁の向こうにまわして、各課の別室が集まるエリアにたどり着く。臨時に編成されたタスクフォースが収まる場所。作り付けられたパネルには『許可を受けないでこの内に立ち入ることを禁止する』と書かれ、カードリーダーさえ仕掛けられている。管理局員のIDカードでセキュリティを解除し、ベルはオフィスの深部に踏み込んでいった。

科学技術省大臣官房遺失技術情報統括官組織設置準備室。危険指定遺失物^{ロス}ロギア^{ギア}組織として設置が進められている、古代遺物管理部のカウンターパートだ。ロスロギア関連の事案に対して速やかな対応——この場合、対応とは法的な対応だ——ができるようになるという。現在は各管理世界の条例で無理矢理に権限を移譲しているのを、この組織の

設置を含んだ改正科学技術省設置法によって国際法上の規則として運用できるようになる。連合政府首相による古代遺物緊急事態宣言への対応を、武装隊が一元的に遂行できるようになるわけだ。

4年前にロストログアによって引き起こされた首都第八空港火災を契機として立ち上がった議論が、今となつては陰謀の隠れ蓑になつている。ロストログア対応を主任務とする組織だから、一見では他の組織が介在していることはわからない。うまい隠れ蓑を選んだものだ。感心しつつ、ベルは空いた椅子に腰を下ろす。